

第7回講座

避難所運営 子どもも重要  
共助に地域連携不可欠

石巻西高元校長

斎藤幸男さん

仙台・片平地区連合町内会長

今野均さん

東日本大震災の伝承と防災の担い手育成を目的に河北新報社などが開く通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」第2期の第7回講座が15日、仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスであった。

今回から震災復旧期を対象とする第2フェーズがスタート。「避難所の苦闘」をテーマに、石巻西高(東松島市)で当時校長だった齋藤幸男さん(64)と仙台市青葉区の片平地区連合町内会長の今野均さん(76)が講師を務めた。

言。同地区では震災前、片平小と片平市民センターの2避難所で合わせて650人の収容を想定していたが、実際は地元住民以外も含め約2000人が押し寄せ、住民の大半が避難所に入れられないという事態に陥った。「地区住民が自主運営す

る『がんばる避難施設』を増やしたり、マップの周知を図ったりと、防災活動の基本は地域にある」と訴え、「共助には地域の連携や協働が重要だ。地域イベントを通じ次世代を育て持続可能な防災まちづくりを進めたい」と力を込めた。

ではなかったが、混乱の中、手探りで避難所運営を始めた」と振り返った。石巻西高は最大390人が避難し、約700体の遺体も運びこまれた。齋藤さんは「災害と向き合うことは命の教育だ」とも強調。「避難所では学校と地域の協力が不可欠だ。縦割りの運営組織図は役に立たない。災害発生から3日間は顔の見える相互協力の発想が要る。お互いさまの精神を持ち子どもも積極的に運営に参加させて」と訴えた。

「避難所では学校と地域の協力が不可欠だ。縦割りの運営組織図は役に立たない。災害発生から3日間は顔の見える相互協力の発想が要る。お互いさまの精神を持ち子どもも積極的に運営に参加させて」と訴えた。

講話後のグループ討議では「避難所では子どもの柔軟な発想を生かしていく心が構えが大事だ」「都市部の避難所での混乱は見落としがちだ。高齢者や外国人などを想定し、日ごろから考えていかななくてはならない」といった意見が出た。

齋藤さんは震災時、他の職員とともに同高で高校入試の業務に従事。生徒の大半は帰宅しており、揺れの後には安否確認や災害対策本部の設置などに追われた。齋藤さんは「津波の黒い水をかきわけ多くの人が学校に殺到した」と切り出し、「当時、学校は指定避難所

平地区という市中心部での避難所運営の難しさを証

311 伝える／備える 次世代塾

第2期



仙台市中心部の学校には大勢の避難者が押し寄せた  
=2011年3月11日夜、仙台市青葉区の荒町小

受講生の声



若者の力が大切

学校が避難所となり、教員や生徒を中心に運営されたことに驚きました。都市部の避難所は住民より帰宅困難者や外国人が多かったことも知りました。子どもと若者が災害と向き合うことが大切と考えました。(東京都品川区・上智大3年・津田真由子さん・21歳)



役割で意欲湧く

避難所で一人一人に役割を与えることで被災者と運営側に信頼が生まれ、対等な関係を築けることを学びました。防災を楽しく学ぶ方法も紹介され、行事などで備える大切さを発信したいと思いました。(仙台市宮城野区・東北福祉大2年・内村大樹さん・19歳)



留学生支援必要

大学に留学生が多く、外国人もスムーズに避難できる取り組みが必要と感じました。(仙台市泉区・東北大3年・佐野真子さん・21歳)

メモ 311「伝える／備える」次世代塾を運営する「311次世代塾推進協議会」の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工業大、宮城学院女子大、尚絅学院大、仙台白百合女子大、学都仙台台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構。協議会事務局は河北新報社防災・教育室=メール jisedai@po.kahoku.co.jp